

## 実践研究 中級日本語学習者の移動動詞「行く」「来る」の習得について : 学習者の使用状況に関する調査を通して

著者	許 明子, 小川 恭平
著者別名	HEO Myeongja, OGAWA Kyohei
雑誌名	国際日本研究
号	8
ページ	277-297
発行年	2016-03
その他のタイトル	Teaching Innovations and Practices On the Acquisition of Movement Verbs by Intermediate Level Japanese Language Learners : A Survey of iku/kuru Usage
URL	<a href="http://doi.org/10.15068/00145471">http://doi.org/10.15068/00145471</a>

実践研究

## 中級日本語学習者の移動動詞「行く」「来る」の習得について —学習者の使用状況に関する調査を通して—

On the Acquisition of Movement Verbs by Intermediate Level Japanese Language Learners:  
A Survey of *iku/kuru* Usage

許 明子 (Myeongja HEO)  
筑波大学人文社会系 准教授

小川 恭平 (Kyohei OGAWA)  
筑波大学人文社会科学部国際日本研究専攻 前期課程

日本語の移動を表す動詞イク・クルと補助動詞テイク・テクル<sup>1</sup>は話し手の視点を表す表現として使用頻度が高く、重要な表現であると言える。しかし、中級レベルにおける日本語学習者には方向性を混同しているケースや、テイク・テクルの脱落などの誤用が見られる。そこで、本研究では、日本語母語話者と日本語学習者を対象に、移動を表す動詞と補助動詞の使い方について、調査を行い、比較分析を行った。国内の大学で学ぶ中級前期レベルの日本語学習者15名を対象に文法項目イク・クルの授業の前後に、穴埋め式の文完成アンケート調査を実施し、当該項目の使用状況と学習効果を測定した。アンケートは日本人大学院生にも実施し、学習者の結果と比較した。学習者の一部には当該項目に関する認識についてインタビュー調査を実施した。

その結果、本動詞の方向性の意味については一部改善も見られたが、混同による誤用が散見された。他方、補助動詞テイク・テクルについては脱落による誤用が改善され、インタビューからも補助動詞の意味の理解が進んでいることが確認された。

The verb *iku/kuru* and auxiliary verb *te iku/te kuru* expresses movement, has a high frequency of use as expression from the speaker's point of view, and is an important expression in the Japanese language. However, Japanese learners at the intermediate level seem to be confused about the direction or the meaning of the verbs and often make errors. To understand why this occurs, in this study, we have administered a questionnaire survey to native Japanese speakers and also to Japanese language learners. The survey inquired as to how they used verbs in the *te iku/kuru* form. We then performed a comparative analysis to investigate the results.

Our target sample was 15 Japanese language learners in an intermediate level class. Some of the learners were interviewed about their understanding of the verbs and personal thoughts about how they improved their usage. There were some errors, but overall the understanding of the verb *iku/kuru* and *te iku/te kuru* improved. This confirmed that the classes proved to be effective for intermediate level Japanese language learners.

キーワード：移動動詞 イク・クル テイク・テクル 中級レベル日本語学習者 習得状況

Keywords: Movement verbs, *iku/kuru*, *te iku/te kuru*, Point of view, Japanese learners at intermediate level, Language acquisition

<sup>1</sup> 本文では、「行く」「来る」が本動詞として使われる場合は「イク」「クル」と表記し、補助動詞として使われる場合は「テイク」「テクル」と表記する。

## はじめに

日本語のイクとクルは人・モノの移動を表す本動詞であるが、テ形に接続してテイク・テクルの補助動詞としても使われている。イク・クルは人・モノが目的地まで遠ざかるのか近づくのかという移動の意味だけではなく、話し手が動作の起点に注目するのか、到達点に注目するのかという視点を表す表現でもある。日本語のイク・クルに当たる移動動詞は、英語の「to go/ to come」、ロシア語の「идти *idti*/ прийти *priyti*」、中国語の「去 *qu*/来 *lai*」、韓国語の「가다 *kata*/오다 *ota*」のように他の言語にも存在している。しかし、日本語の移動動詞と他の言語の移動動詞の特徴は、使い方や視点の表し方において他言語と異なる特徴を有しており、日本語教育の現場では移動動詞の混同、脱落、視点の不安定などの誤用につながる場合がある。

中級レベルの学習者の特徴の一つとして、初級レベルで学んだ文法項目であっても実際には正しく使えず、定着が遅い文法項目が多い。それにも関わらず、学習者の中には既習項目については反復学習を好まず、新しい文法項目の学習を望むケースがあり（許ほか 2009）、学習が進んでも習得が遅れたり、誤用が改善されなかったりする項目がある。本研究で取り上げるイク・クルもそのような項目の一つであり、母語や学習経験のある他の外国語から直訳したり意味を類推したりしていることが多く<sup>2</sup>、上級レベルに達しても方向性の混同や補助動詞の脱落などの誤用が見られる。

そこで本研究では、中級レベルの日本語学習者を対象に移動動詞に関する使用状況を把握し、教室における学習効果を検証することを目的として、教室学習の前後に2回にわたってアンケート調査を実施し、学習効果について検証を行った。2回目のアンケート調査後に調査協力者のうち6名を対象に、イク・クルの方向性と用法をどのように認識しているのか、また対象の移動と状態の変化を表す意味をどのように理解し使用しているのかについてインタビュー調査を行った。

また、本研究では日本語学習者だけではなく、日本語母語話者にも同様のアンケート調査を実施したが、両者にどのような違いがあるかについても分析を行う。

## 1. イク・クルの先行研究

イク・クルの意味は物理的な空間の移動だけではなく、話し手の視点を表したり、ある事象に対する知覚を表したり、時間的な変化を表す場合もあり、多義性を持っている。しかし、日本語学習者はイク・クルの多義性や学習項目としての認識が薄く、その結果、方向性の混乱が続いたり、補助動詞の脱落が改善されなかったりすると考えられる。本研究の4節でも述べているように、学習者自身はイク・クルの文法項目について「母語にも同じ意味がある」「初級で勉強しているから分かる」「使い方は簡単だ」などと述べており、学習すべき文法項目としての認識が強くないことが分かる。

本節ではイク・クルの本動詞の基本的な意味や用法、テイク・テクルの補助動詞の基本的な意味を確認し、外国人日本語学習者の誤用例と教育現場での問題点、日本語教育現場での学習状況について先行研究を概観する。

### (1) イク・クルの本動詞の意味と用法（「基本動詞ハンドブック」国立国語研究所）

国立国語研究所の「基本動詞ハンドブック」は、日本語学習者が日本語の基本動詞について体系的かつ効率的に学習ができるよう、プロトタイプの開発を行ったプロジェクトの成果物である（プラシヤント 2013）。日本語学習者にとっても日本語の基本動詞の意味と用法、コロケーション情報などの学習に役立つデータベースである。イク・クルについても基本的な意味と拡張された意味が多義ネットワークとして示され、用例と一緒に紹介されている。<sup>3</sup>

基本動詞ハンドブックによれば、イクは「目的のための移動」「特定の方向への移動」「経路を遠くに移動」へと細分化され、その他に「通勤・通学」「関心の向き先」「情報の伝達」「死去」「納得」「道理との矛盾」へと派生して22の意味に拡張されると記されている（図1）。クルもイクと同じく、「話者への移動」を基本的な意味とし、「ものの到達」「自然現象の発生」「構成員の新加入」「時期・順番の到来」「設備の開設」「話者への働きかけ」「話題の取り上げ」「ものの位置占拠」など、図2で示すように、15の意味に拡張されていると記されている。イク・クルは移動の方向性を示すだけでなく

<sup>2</sup> イク・クルの項目に対する学習者の意識については本研究の4節で詳細を述べる。

<sup>3</sup> <http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/te-iku/>、<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/te-kuru/> を参照のこと。（2016年2月2日最終アクセス）

様々な意味を表しており、この多義性こそ日本語学習者にとっては習得されにくい要因の一つであると思われる。<sup>4</sup>

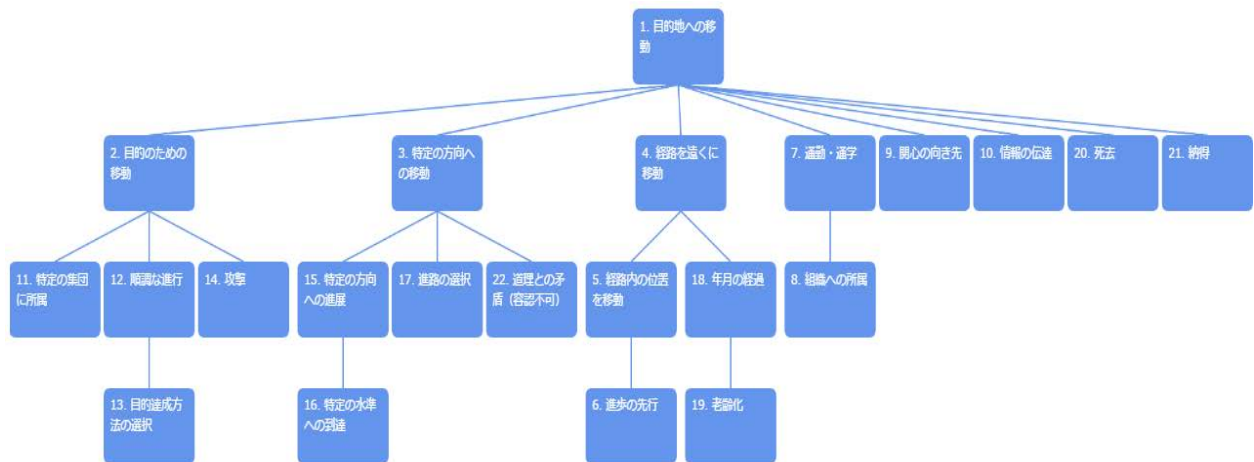


図1 「いく」の多義ネットワーク

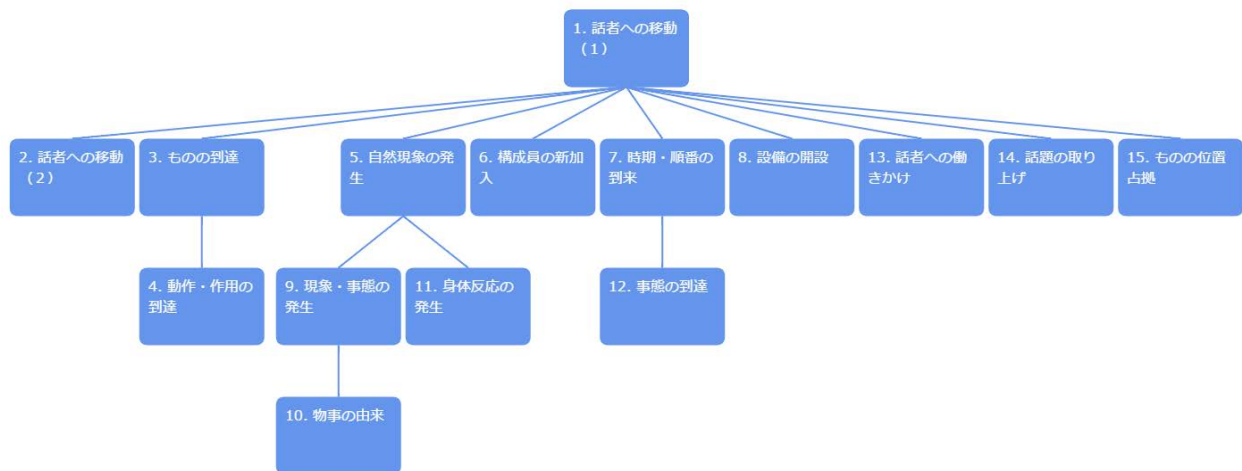


図2 「くる」の多義ネットワーク

また、日本語学習者にとっては本動詞に比べて習得が難しいとされている補助動詞テイク、テクルは以下のような意味を表すとされている。

<テイク>

- ①経路をへて遠ざかる移動（人・動物・ものが、何らかの経路を通過して、話者のいる（または注目する）場所から遠くへ移動する。）
- ②動作をして遠ざかる移動（人・動物・ものが、何らかの動きによって、話者のいる（または注目する）場所から遠くへ移動する。）
- ③動作後の遠ざかる移動（人がある動作を完了し、話者のいる（または注目する）場所から遠くへ移動する。）
- ④現時点からの継続（人が、今（または注目している時点）から、動作を継続する。）
- ⑤現時点からの段階的変化（事態が、今（または注目している時点）から段階的に変化する。）
- ⑥付帯して遠ざかる移動（人が、何らかの動作の結果を伴って話者のいる（または注目する）場所から遠くへ移動する。）
- ⑦遠ざかる移動（人・動物・ものが、話者のいる（または注目する）場所から遠くへ移動する。移動する時間の長さが強く意識される。）

<sup>4</sup> <http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/iku/>、<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/headwords/kuru/> を参照のこと。(2016年2月2日最終アクセス)

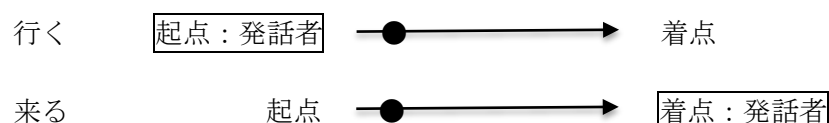
### <テクル>

- ①話者への移動1(人・動物・ものが話者のいる(または注目する)方向・場所に向かって移動する。)
- ②話者への移動2(人・動物・ものがある動作・状態を維持しながら、話者のいる(または注目する)方向・場所に向かって移動する。)
- ③話者への移動3(人がある動作を済ませて、話者のいる(または、注目する)場所に移動する。)
- ④動作の継続(ある動作が現在に至るまで続く。)
- ⑤事態の進行(ある事態が進行し、ある段階に至る。)
- ⑥話者への働きかけ(相手があるやり方で話者側に働きかける。)
- ⑦現象・事態の発生(ある現象・事態が起こる。)

このような本動詞のイク・クルの多義性、テイク・テクルの話し手の関与の仕方を表す意味などは、日本語学習者にとって学習の難しさにつながる要因の一つであろう。基本動詞ハンドブックでは、目的地への移動という基本的な語義から動作の方向性や事態の展開、抽象的な意味への派生について詳細に説明している。外国人学習者の場合、初級、中級、上級の日本語力に合わせてイク・クルの意味が理解できるように、レベルに応じた意味と構文の説明がなされている。イク・クルの多義性については、人の移動を表す意味からメタファーしやすく、抽象的な意味へと進みやすいという指摘(由井1995)もあるが、基本動詞ハンドブックではさらに詳細な分類と記述がなされており、日本語教育現場において非常に有益であると思われる。

#### (2) 遠心的・求心的な方向性(天野 2008)

天野(2008:88~89)はイク・クルの動作の移動と、話し手(発話者)の視点について、以下の図で説明している。「行く」は自分から遠ざかる遠心的な方向性、「来る」は自分に近づく求心的な方向性の意味を持つ語であると述べられている。



イクは話し手と関係のない他者の移動を表す場合もあるが、移動の起点(出発点)に話し手の視点が置かれる際にはイクが用いられ、移動の着点(到達点)に視点が置かれる際にはクルが用いられる。<sup>5</sup>特に、日本語のクルは「発話者と関わりが無いように見える人物への移動・授与であっても、その人物に発話者の視点があるという解釈が強制的に与えられる、特別な役割を担ったもの」と述べられており、クルは移動の意味だけではなく話し手の視点を表す表現である点で注意が必要であると言える。

日本語学習者の場合、移動の方向性だけではなく、クル、テクルの視点に関する意味を理解しないと、方向性の混同、視点表現の脱落などの誤用につながる恐れがある。日本語学習者のイク・クルの習得については、移動の意味の混同、補助動詞の脱落、移動動詞の過剰使用による誤用が多く見られる(吉成2014)が、本研究では市川(1997)の『日本語誤用例文小辞典』からイク・クルの混同、脱落に焦点を当てて誤用例を紹介する。

#### (3) 日本語学習者イク・クルの習得状況(菅谷 2002)

日本語学習者のイク・クルの習得状況について、菅谷(2002)ではプロトタイプ理論からイク・クルの意味の広がりや習得過程について分析を行っている。イク・クルの意味の広がりや、①人の物理的移動、①'話者が動く物としてみなしてももの物理的移動、②認知的移動、③時間的移動と述べており、日本語学習者の習得順序についてKYコーパスの分析を行っている。

その結果、本動詞の場合、全体的な使用数はクルよりイクが多く、初級学習者はクルよりイクの習得が早い、イクの過剰使用の傾向が見られたと述べている。一方、補助動詞の場合は本動詞と違っ

<sup>5</sup> 日本語の授受動詞も視点を表す表現であるが、アゲル系(やる、あげる、さしあげる)はイクと同じく遠心的であり、クレル系(くれる、くださる)はクルと同じく求心的であると述べている。

てテクルの使用数が多く、上級・超級になると、認知的用法や時間的用法も多用されるようになり、過去から現在、現在から未来へと経過を示す用法が多く観察されたと述べられている。イク・クルの本動詞の習得については、人の物理的空間移動から抽象的移動へと習得が進み、テイク・テクルの補助動詞の習得については物理的空間移動から認知的用法、時間的用法に使用が拡張されていることが確認されたと述べられている。

イク・クルの多義性や意味の広がりについては、人の移動を表す意味においてメタファーが進みやすく、他の意味へと広がりを見せるという指摘がある（由井 1995）。由井（1995）では、移動動詞の主体が人である場合、さらに意味の抽象化が進むと述べられているが、日本語学習者のイク・クルの習得過程においてもこれらの意味と広がりとの関係があることがうかがえる。

#### （４）日本語学習者の誤用例（『日本語誤用例文小辞典』市川 1997）

テイク・テクルの誤用の傾向としては、①テイク・テクルが抜けてしまう脱落、②非用、③必要のないところに入れてしまう付加、④「ようになる」とテクルの混同、「ている」とテイクの混同、の４つが挙げられ、誤用例が示されている。本研究では、テイクとテクルの混同、脱落を中心に以下に誤用例を挙げる。

##### 混同（市川 1997 : 115～120）

###### 【×ていく→○てくる】

(1) A : 川村さん、いらっしゃいますか。

B : 今、となりの部屋なので呼んでいきます（→きます）。＜インドネシア＞

###### 【×てくる→○ていく】

(2) A : もう遅いですから、私のうちでどうぞごはんをたべてきて（→たべていって）ください。

B : ありがとうございます。＜タイ＞

(3) A : 帰りませんか。

B : もう少しここで勉強してくる（→いく）から、先に帰ってください。＜中国＞

##### 脱落（市川 1997 : 114）

(4) ゆうべ寝ようとしているところへ、急な仕事のできたので（→と言って）、社長が電話した（→してきた）。＜タイ＞

(5) 遠くから友達がたずねてくれて（→訪ねてきてくれるのは）うれしいんじゃないか（→うれしいと思う）。＜韓国＞

(6) 車が増えたために交通事故が多くなる（→なってきた）。＜中国＞

(7) 彼はバスを降りると、すぐ学校の方へ走ってΦ（→いって）しまいました。＜ホンコン＞<sup>6</sup>

市川の誤用例には学習者の母語には関係なくさまざまな誤用例が見られ、学習歴も半年未満の例もあれば3年程度の例も見られた。菅谷（2002）では中国、韓国、米国の中級レベルの学習者は移動と方向に正用が多く見られたと述べられているが、上記のように中韓米に加え、それ以外の言語話者からも移動、方向性の誤用例が見られる。

特に、(4)のような対象（電話）の移動を表すテクルの脱落は上級レベルに達した学生にも見られ、習得が難しいと思われる。菅谷（2002 : 75）においても、上級・超級になると認知的用法、時間的用法は多用されるようになるが、対象の移動は使用されなかったと指摘されており、誤用が起こりやすくなる習得されにくい用法であると言える。中国人学習者のイク・クルの誤用について張（2001）は日本語と中国語の違いから分析しており、二次的運動を表すテイク・テクルの脱落、循環型運動を表すテイク・テクルの「Vにクル/イク」の代用、対象物の移動の過剰使用の誤用パターンを指摘している。

日本語学習者がイク・クルを学習する際に誤用が起こる原因は、母語の影響や学習歴、日本語能力

<sup>6</sup> 寺村コーパス (<http://teramuradb.ninjal.ac.jp/>) には以下の脱落の例がある。(2016年2月2日最終アクセス)「以後、父は商もやった。そうすると家庭の経済がだんだん好転した。」(香港)

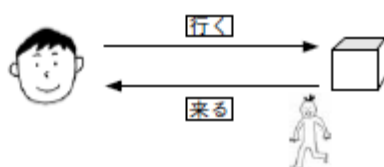
などさまざまであると思われるが、共通して起こりうる問題は移動の方向性の混同、脱落があると考えられる。次節では、中級レベルの日本語教育の現場でイク・クルをどのように指導しているのか、教科書の分析を行う。

## 2. 日本語クラスにおけるイク・クルの指導例

今回対象とした中級文法クラスでは、許ほか(2013)が開発した『レベルアップ日本語文法中級』(以下、『レベルアップ』)を主教材として使用した。文法項目の学習を通してコミュニケーション能力の向上を目指しているが、本教科書を用いた日本語クラスで、イク・クルをどのように指導したかを概観する。<sup>7</sup>

『レベルアップ』では、第7課でイク・クルを取り上げ、大きく5つの用法を紹介しているが、各用法と移動の意味について簡略にまとめる。

### ①空間の移動：本動詞としてのイク・クルの方向性 (p60)

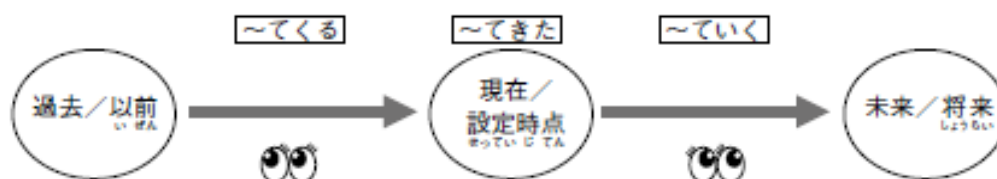


### ②動作が向かう方向：補助動詞としての動作の方向性 (p61)



### ③対象の移動：対象になるものが話し手に向かう方向性<sup>8</sup>

### ④時間的な状態の変化：変化を表す動詞と一緒に使われる時間的な変化 (p61)

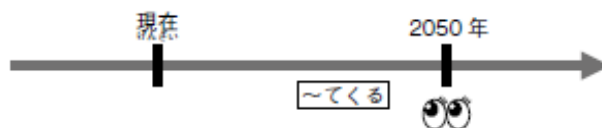


<sup>7</sup> 中級レベルの教科書の開発の経緯については宮崎ほか(2012)、中級レベル文法クラスの実践報告については鈴木ほか(2012)を参照されたい。また、中級レベルの学習者のための日本語教育文法クラスの在り方については許ほか(2013)を参照されたい。

<sup>8</sup> テイク・テクルの「対象の移動」の用法について庵ほか(2000:119)では「空間的用法2」として「対象の移動」と分類している。「品物を送る、手紙を書く、電話をかける、届ける」などの例を挙げて対象の移動を表す用法と説明している。

⑤知覚：感覚動詞、知覚を表す動詞と一緒に使われる状態の変化

テクルの場合は、以下のように、特定の時点を設定し、その時点に向けて状態が変化していることを表す用法についても説明を加えている (p64)。



また、付帯状況の意味を表す「ついていく／くる」「入っていく／入ってくる」などの表現については慣用的な表現として取り上げており、中級レベルの学習者に誤用が起こりやすいこれらの用法については簡潔に説明されている。

授業では、日本語のイク・クルが学習者の母語ではどのように表現されるかを確認した後、以上の基本的な意味や用法について確認を進めている。具体的には次の図3のように、授業の最初にイク・クルにあたる学習者の母語との対応関係を考えさせ、それが日本語のイク・クルとは必ずしも一致しないということを意識させた。その上で、プロトタイプ理論の観点からイク・クルおよびテイク・テクルの習得を論じた菅谷 (2002) の指摘を踏まえながら、まずは日本語の本動詞イク・クルがどのように用いられるかを、話し手の視点を中心にして導入した。授業の中ではイクを「話し手のいる場所から離れる移動」、クルを「話し手に近づく移動」として説明し、その用法が補助動詞を使用した場合にも根底にあることを理解させた。補助動詞の用法については、プロトタイプの物理的空間移動から、非プロトタイプの時間的用法、認知的用法へと順に解説していった。

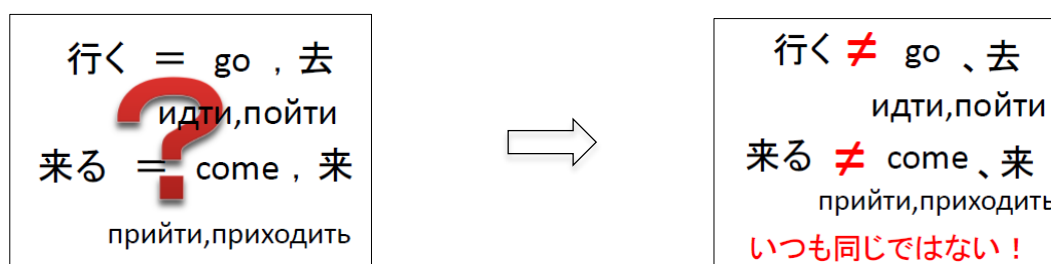


図3 教室での指導例

### 3. 日本語学習者のイク・クルの使用状況に関する調査

本調査は2015年度春学期期間中に『レベルアップ』を主教材として使用した中級文法クラスにおいて、文法項目イク・クルに関する学習効果を測ることを目的とし、アンケート調査及びインタビュー調査を行った。また、結果の比較のために、日本語母語話者にも同様のアンケート調査を実施した。以下でその詳細を述べる。

#### 3.1 調査の概要

- ・対象：国内の大学で日本語の授業（文法クラス）を受講している中級レベルの日本語学習者<sup>9</sup>（以下、NNS）15名と日本語を母語とする大学院生（以下、NS）22名<sup>10</sup>
- ・方法：2回の穴埋め式のアンケート（資料1を参照）およびNNSの一部にインタビュー調査を実施。1回目と異なる傾向の結果が表れたNNSの6名を対象に、2回目のアンケートの後に1人ずつ30分程度のインタビュー調査を実施

<sup>9</sup> NNSは学習時間500時間程度の中級前期レベルである。多国籍のクラスであり、授業は直接法で行っている。

<sup>10</sup> NNSの1回目の調査では19名、2回目では17名から回答が得られたが、2回とも回答が得られた15名を分析対象とする。NNSの国籍は、ギニア（1名）、キルギス（3名）、カザフスタン（1名）、マレーシア（1名）、ベネズエラ（1名）、中国（5名）、台湾（1名）、ドイツ（1名）、ブラジル（1名）である。NSは22名から協力が得られたが、専門分野は文系、理系が混在しており、特定の分野に偏らないようにした。



1回目のアンケートはウェブ上の教育支援システム manaba で実施 (資料2)。<sup>11</sup> 2回目は全員紙媒体で実施。NS にはインタビューは行わず、紙媒体でアンケート調査を1回のみ実施

・期間：1回目の調査はNNS、NSともに2015年6月3日～17日に実施

2回目の調査はNNSのみ7月28日に実施

NNSの6名を対象に7月29日に1人ずつ30分程度インタビュー調査を実施

・内容：アンケートは全10問、総得点11点満点である。(資料1)

問題の構成は学習者に誤用が起りやすい意味、用法の中で、4つの意味に焦点を絞って調査を行った。①本動詞の方向性(問1～4)、②補助動詞(問5～7)、③対象の移動(問8～9)、④時間の経過による状態の変化(問10)、の意味について、場面を設定し、その中に移動動詞を使って会話を完成させるような問題を作成した。

調査協力者には調査の目的やターゲット文法イク・クルに関する調査であることは告げず、「日本語の文を作ってみましょう」と題して回答を依頼した。

### 3. 2 調査の結果

#### 3. 2. 1 NNSの本動詞の結果

本動詞の移動表現に関する問1～問4の1回目と2回目の結果を表1に示す。イク・クルの方向性が正しいものは■で記した。<sup>12</sup>

表1 NNSの調査結果(本動詞)

	問1(行く)		問2(行く、行きます)		問3(行く)		問4(行けない)	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
NNS1	いく	くる	いく	いく	いく	いく	いけない	こない
NNS2	いく	くる	いく	いく	いって くる	おわる	くる	いく
NNS3	行く	行く	いく	くる	いく	行く	いかない	行かない
NNS4	行く	来て	行く	行く	行く	行く	行けない	行かない
NNS5	行く	いく	行く	行く	戻る	いく	行かない	来られない
NNS6	行きます	行きます	くる	くる	行く	行く	行けない	しゅっせ きする
NNS7	行く	行く	行く	行く	行く	行く	通えない	行けない
NNS8	行く	行く	行く	行く	行く	行く	来られない	こない
NNS9	行く	行く	来る	行く	行く	来る	来られない	行かない
NNS10	行って	行く	行く	行く	見に行く	見て行く	行けない	欠席する

<sup>11</sup> 中級文法クラスでは manaba を用いて教室学習以外の学習支援を行っている。授業以外でも学習する文法項目の予習及び復習ができるように、選択式や自由作文式の問題を提供し、支援を行っている。今回の調査は中級文法コース用に開設した manaba 上で公開し、実施した他、紙媒体のアンケートも並行した。調査協力に関する同意書は manaba 上及び紙面の両方で行っている。

<sup>12</sup> ■で記した回答例には活用や接続に誤りのあるものも含まれているが、ここではイク・クルの方向性のみを判断基準とした。

表 1 NNS の調査結果 (本動詞)

NNS11	会いまし よう	行く	いく	行く	確認する	行く	行かない	行かない
NNS12	行って	行く	行く	行く	見に行く	行く	行かない	行かない
NNS13	行くよ	来る	行く	行く	行く	行く	行けない	行けない
NNS14	行く	行く	行く	行く	行く	行く	行かない	行けない
NNS15	行く	くる	行く	行く	かえる	見て	こられない	行かない

全体的な結果を見ると、例えば問 1 のように、1 回目ではイクと正しく回答していた学習者が、2 回目ではクルと回答している例が散見された。本動詞の使用は短期間では改善されにくい母語の影響や、学習による方向性の混同などの原因があるのではないと思われる。

以下、1 回目の調査と 2 回目の調査の回答内容について、各問題別に検討する。問 1 は、話し手が現在地から離れて図書館へ移動するため「行く」が正解となるのに対し、1 回目の調査では、「行って」「行くよ」など前後の文脈に合わない回答が見られた他、2 例ではあるが「待てて」「会いましょう」など、空欄直前の助詞「へ」に合わない動詞の選択も存在した。ただし、方向を混同したクルを用いた回答は 1 例もなかった。しかし 2 回目になると、クルが 5 例見られ、その回答者はすべて 1 回目ではイクと回答しており、方向性の混同が見られた。

問 2 では、側にいる家族が話し手から離れる移動のため「行く」が正解となるのに対し、1 回目の調査では方向を混同したクルを用いた回答が 2 例見られたが、それ以外はイクを用いた回答であった。2 回目もクルの回答は 2 例であったが、そのうち 1 例は 1 回目ではイクと正しく回答できており、ここでも本動詞の混同がうかがえた。

問 3 では、話し手が発話時の地点から離れるため「行く」が正解となる。1 回目の調査では「置いて」「かえる」「確認する」など前後の文脈に合わない回答が見られた他、「いってくる」と方向が不自然な回答も見られた。2 回目ではやはり 1 回目のイクがクルになっている回答が 1 例見られた。その一方で、1 回目で「戻る」「確認する」となっていた回答が、2 回目ではイクとなった例も見られた。

問 4 では、話し手が発話時の地点から離れる移動であり、なおかつ文脈からその移動ができないことを表すため「行けない」が正解となる。1 回目ではこれを「来られない」とする回答が 3 例あった。2 回目でもクルを用いた回答は 3 例あったが、そのうち 2 例は 1 回目ではイクを用いた正答であった。その他、2 回目では文脈に合わない「しゅっせきする」や、前後に合わない「欠席する」などの回答例も見られ、イク・クルの方向性の混同と同時に文脈が読めなかったと思われる回答も増えていた。

### 3. 2. 2 NNS の補助動詞の結果

補助動詞テイク・テクルに関する問題の 1 回目と 2 回目の結果を表で示す。動作を行う方向を表す補助動詞 (問 5~問 7) の結果を表 2、対象の移動 (問 8、問 9) と時間的な状態の変化 (問 10-1、問 10-2) の結果を表 3 にまとめた。1 回目では補助動詞の脱落が多く見られたのに対し、2 回目では脱落の改善がうかがえた。表 2 では、テイク・テクルが用いられている回答を   で記した。<sup>13</sup>

<sup>13</sup>   で記した回答例には活用や接続に誤りのあるものも含まれているが、ここではテイク・テクルの使用を判断基準とした。そのため、誤りとは言えない回答であってもテイク・テクルの脱落しているものは分析の対象からはずした。

表2 NNSの調査結果(補助動詞)

	問5(買ってくる)		問6(呼んできましょう)		問7(持っていく、作っていく)	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
NNS 1	かう	かいものを買ってくる	よびます	よんできますよ	つくる	つくる
NNS 2	たべる	たべる	よびましょう		つくっていく	たべる
NNS 3	かってくる	かってくる	よんでいいです	よんできますよ	つくる	つくり
NNS 4	かいたい	行く	行きます	よんで来ろう	つくって行く	持って行く
NNS 5	食べ物を買ってくる	パンを買っていく	呼びます	よんできますよ	作る	持っていく
NNS 6	なにかかかっておく	なにかかかいます	よびます	よんでほしいで	つくる	つくる
NNS 7	買いに行ってくる	行ってくる	呼びに行きます	呼びに行く	する	作りに行く
NNS 8	買う	買ってくる	呼びます	呼んできましょう	作る	作っていく
NNS 9	買う	買ってくる	呼びます	呼びます	作る	作る
NNS 10	買いに行く	買いに行く	案内します	呼んできます	作る	つくる
NNS 11	買い物に行きつもり	買いに行く	呼んで来ます	呼んできてくれます	作り	作る
NNS 12	買ってくる	買って来る	呼んできましょう	呼んで来る	作る	作る
NNS 13	何か買ってくる	買ってくる	呼びに行きますか	行きましょう	作る	つくる
NNS 14	買う	買う	呼びに行きましょう	よんできますよ	作る	作る
NNS 15	買ってたべる	買ってくる	よんでいきましよう	よんできます	作ってくる	もってくる

問5では、コンビニで食べ物を買った話し手が発話時の地点へ戻ってくるため、「買ってくる」が正解となる。1回目の回答には発話時の地点に戻ってくる意味を表すテクルが脱落した「買う」や、一方向的な「買いに行く」のようなものが多数見られた。2回目になると、テクルを用いた回答が5例から8例へと増え、そのうち4例が1回目ではテクルの脱落していたものであった。

問6では、話し手が鈴木さんと呼んだ後に発話時の地点に戻ってくるため、問5と同様にテクルが必要であり、また申し出の表現であるため「呼んできましょう」が正解となる。1回目の回答にはテクルが脱落した「呼びます」や、一方向的な「呼びにいきます」などが見られ、テクルを用いた回答は2例のみであった。しかし2回目になると、テクルを用いた回答は10例まで増えた。活用の誤りや申し出の「ましようか」の形にはなっていない回答例も見られるものの、1回目比べてテクルが意識されるようになってきているように見える。

問7では、料理を用意してその地点からパーティー会場へと離れる移動であるため「持っていく」「作っていく」などが正解となる。1回目の回答ではテイクの脱落した「作る」が大半を占めた他、方向を混同したと思われる「作ってくる」も1例見られた。2回目の回答ではテイクを用いたものが2例から3例へと増えたが、テイクの脱落した「作る」が依然として7例見られ、またテクルを用いた回答も1例あった。

表3 NNSの調査結果(対象の移動、時間的な状態の変化)

	問8(送ってきた)		問9(かけてきて、してきて)		問10-1(なってきた、なっている)		問10-2(なっていく)	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
NNS 1	おくってくれ	もらった	かけてくれて	かけてきました	なった	なった	なる	なる
NNS 2	おкуった	おкуった	かかけて	して	なってくる	なった	なってくる	なってきた
NNS 3	いただきました	つくってくれた	して	かけて	なっている	なってきた	なっている	なっている
NNS 4	持って行った	持って来た	して	かけて来て	なって来た	なって来た	なってしまうた	なって来た
NNS 5	送られた	送ってきた	された	かけて来た	なっている	なっていく	なる	なっていく
NNS 6	かった	つくった	かけて	かけて	なっていく	なってきた	なりません	なりません
NNS 7	作った	作ってくれた	かけてくれて	かけてきて	なっている	なりました	なる	なりました
NNS 8	くれた	作った	かけてくれて	かけてきた	なってくる	なってきた	なっていく	なっていく
NNS 9	送っ	作った	して	かけてきたので	なる	なってきた	なる	なる
NNS 10	もらった	送ってくれた	来て	かかてきて	なった	なっています	なる	なっていく
NNS 11	手づくりな	手作った	かかって	かけてきて	なる	なる	なる	なる
NNS 12	作った	作った	かけてきて	かかてきた	なる	なる	なった	なった
NNS 13	つくってくれた	おくってくれた	かけてくれたから	かかてくれて	なった	きた	なっていく	なる
NNS 14	作った	作った	かけて	かけてきて	なっている	なってきた	なっていく	なってきた
NNS 15	つくった	作った	して	かかてきた	なっている	なってきた	なってきた	なれていきます

問8では、母国にいる母親のもとから日本にいる話し手のもとへとお菓子が移動するため「送ってきた」を正解とした<sup>14</sup>。1回目の回答には「おкуった」など求心的方向を表すテクルが脱落しているものの他、「もらった」「かった」など文脈に合わないものが見られ、テクルを用いた回答は1例もなかった。2回目の回答にはテクルを使用したものが2例出たが、一方で補助動詞の脱落した「作った」「送った」などが依然として7例あった。

問9では、母が話し手へ電話したという文脈であるため、テクルを用いた「かけてきて」「してきて」が正解となる。1回目の回答には「かけて」「して」のようにテクルの脱落が多く見られ、その他は活用の誤りであった。2回目の回答では「テクル」の使用が1例から11例へと増え、学習者の中でテクルの使用が強く意識化された可能性が示唆された。

問10は空欄を2つ設定したが、10-1は「最近」とあることから発話時以前から発話時までの変化であり、なおかつ話し手が既にその変化に気づいていると考え、テクルを用いた「なってきた」「なっている」を、10-2は発話時から未来への変化と考え、テイクを用いた「なっていく」を想定して作問したが、実際にはテイク・テクルがなくても許容できる回答例が多くなってしまった。テイク・テクルの使用に注目すると、10-1では1回目にテクルを用いたのが4例、10-2ではテイクを用いたの

<sup>14</sup> 問8、9は求心的な方向を表すテクレルを用いた「送ってくれた」「かけてくれた」などの回答も誤りとは言えないが、ここではテクルの使用に着目して言及する。

が3例であった。2回目の調査では、10-1でテクルの使用が4例から7例へ、10-2はテイクの使用が3例から4例へと増えていた。

### 3. 2. 3 NSの結果

NSの回答は以下の表4に示す。日本語母語話者で同じ大学の大学院生という条件でも、回答にかなりのバリエーションがあることが分かる。問1でイクの回答以外に「集合」の回答が4例見られたり、問7に「振る舞う」という回答が見られたりする例である。それでも、日本語学習者とは異なり、NS6の1例を除いて、イク・クルの方向性の混同はほとんど見られなかった<sup>15</sup>。

表4 NSの調査結果

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10-1	問10-2
NS1	来て	行く	行く	行けない	買って来る	呼んで来ましょう	振る舞う	送ってくれた	くれたから	なってきた	なりそう
NS2	集合	来ます	行く	行かない	買ってくる	呼んで来ます	作っていく	送ってきた	掛けてきて	なっている	なると思う
NS3	行きます	うかがいます	行く	行けない	買ってくる	呼んできましょう	作る	送ってくれた	かけてきて	なった	なりそう
NS4	行く	うかがう	行く	行けない	買って行く	呼んできます	作っていく	持たせてくれた	かけてきて	なってきた	なる
NS5	行く	行く	行く	行けない	買って来る	電話します	持って行く	買って来た	かけて来て	なって来た	なってくる
NS6	集合	くる	くる	これない	買ってくる	呼びます	ふるまう	つくった	してきて	なりそう	なりそう
NS7	向かう	うかがう	行く	いけない	買ってくる	よんできましょう	つくってもっていく	送ってきた	かけてきて	なっている	なってしまう
NS8	行く	行きます	行く	行けない	なにか買ってくる	呼びましょう	持っていく	送ってきた	かけてきたから	なっている	なる
NS9	いく	うかがう	いく	いけない	買ってくる	呼んできましょう	作る	作った	かけてきて	なっている	なっちゃう
NS10	行く	行きます	行く	行かない	買ってくる	呼んできます	持っていく	作った	かけてきて	なった	なる
NS11	行く	行く	行く	行けない	買ってくる	呼んできましょう	作ってもっていく	送ってくれた	してきて	なった	なる
NS12	行く	むかう	いく	いかな	買ってくる	よんできましょう	もっていく	作った	くれたから	なりそう	なりそう

<sup>15</sup> NS6は本動詞の方向性が他の回答者とは異なるが、これはNS6が沖縄方言話者であるためであると思われる。これについては永田(1991)が、沖縄各地の旧方言では話者が聞き手の所へ移動する時に「来る」を用いること、新方言では「行く」「来る」が併用されており、地域によっては旧方言と同様「来る」が使用されていることを報告している。

表4 NSの調査結果

NS13	集合	向か います	むか う	行けな い	なにか 買って	よびに いきま す	もって いく	送って きた	してき て	なって きた	なった
NS14	行く	行き ます	行く	行けな い	買って くる	呼んで きます	作って いく	送って くれた	かけて きて	なって きた	なると 思う
NS15	集合	行き ます	行く	行かな い	買って くる	呼んで きまし ょう	持って いく	つくっ た	かけて きて	なって る	なりそ う
NS16	行く	行き ます	行く	行かな い	買って くる	呼んで きまし ょう	持って いく	作った	掛けて きて	なった	なった
NS17	行く	行く	見に 行く	行かな い	買いに 行く	呼びに 行く	作りに 行く	買って きた	かけて きて	なって きた	なって いく
NS18	行く わ	行く	向か う	行けな い	買って くる	お呼び します	ごちそ うする	送って くれた	してき ただけ ど	なって ます	なりま す
NS19	行く	行き ます	行く	行けな い	買って いく	呼んで きまし ょう	持って いく	送って きた	掛けて きて	なった	なる
NS20	行く	うか が いま す	向か う	行かな い	買って くる	呼んで 来まし ょう	持って いく	送って くれた	してき て	なった	なる
NS21	行く	うか が う	行く	行けな い	買って くる	よんで きまし ょう	提供す る	作った	かけて きて	て、嫌 になっ ちゃう	なって しまっ ている
NS22	集合	向か う	行く	行けな い	買って くる	呼んで 来まし ょう	持って 行く	作った	かけて きて	なって いる	なる

問6に関しては、申し出の表現である「ましようか」を用いない回答が多く見られたのが特徴的であった。また、問7は、「振る舞う」「作る」など、テイクを用いない回答が6例見られた。問9に関しては、全回答者が求心的な方向性を表すテクル、テクレルを用いており、これがNNSとの大きな違いであると考えられる。

#### 4. 考察

本節では、調査の結果について主に本動詞の混同、補助動詞の脱落、文法項目イク・クルに関する学習者の認識の変化の3つの観点から考察を行う。また、2回目の調査後に実施したインタビューの内容から学習者の意識とイク・クルの学習の問題点、改善点についても考察する。<sup>16</sup>

##### 4.1 本動詞の混同(問1~4)

本動詞に関する問1~4は、NNS1、NNS2、NNS4、NNS13、NNS15のように、1回目と2回目とでイクとクルが逆になっているものがあり、教室学習が終わった後でも依然として本動詞の方向性の混乱が残っていることがうかがえた。また、方向性のみならずイク・クルの多義性も本動詞の意味理解に影響を与えたのではないかと思われる。

特に、正解がイクである問1では、1回目はクルを用いた回答が見られなかったのに対し、2回目

<sup>16</sup> インタビューを実施したのは、NNS2、NNS6、NNS9、NNS12、NNS13、NNS15の6名である。

はクルを用いて誤答になったケースが見られた。問1は、話し手が聞き手のところへ移動することを表すためイクを使うべきだが、聞き手に視点を置いて話し手の移動をクルで表したために誤用につながったものと思われる。これについては学習者の母語による影響が考えられるが、インタビュー調査でも以下のような発言があり、母語の転移の可能性が示唆された。

- ・(問1について) 私たちは最初ロシア語で考えて、日本語に翻訳して、その時何か間違えることが多いと思います。(回答時も) そのまま翻訳して書いたと思います。(NNS2)
- ・(問1・2について) 話すの時も、日本語を勉強する時も、論文と書くの時も、とりあえず中国語のイメージが出ます。(NNS12)

このようなクルの誤用は英語話者に起こることが指摘されている(大江1975)が、本研究ではロシア語母語話者にも同様の誤用が見られ、学習者の母語の転移の可能性が示唆された。日本語のイク・クルの方向性が母語の発想と異なる場合はNNS2のように負の転移となり、母語と共通した発想であればNNS12のように正の転移となるのだろう。<sup>17</sup>

また、学習の過程における混乱、混同も見られた。授業を受けて、話し手の位置や視点、移動の方向について深く考えるようになった学習者が、かえって考え過ぎてしまって混乱したケースもあったようである。以下のインタビューからも分かるように、学習することによって方向性を混乱したケースや、クルの視点を意識しすぎて、イクと混乱したケースである。

- ・(2回目は) たぶん勉強しすぎて。今は話し手の立場について考えてきました。(1回目は) その時は feeling (中略) 2回目は考えすぎたかもしれません。(NNS13)
- ・鈴木さんは、明日田中さんのところに行くから、田中さんは、田中さんに…なんて言うんだろう。なんか田中さんのところにいくから、田中さんの立場から「来る」と思いました。(NNS13)

NNS13の場合、最初はイク・クルの方向性は理解していたが、学習によって混乱したり、視点を意識したりしすぎて、話し手に視点を置くべきところを聞き手に視点を置いて、本動詞の方向性を混同してしまった例である。

以上のように、学習者の母語にも同様の表現が存在しており、類似点と相違点が存在するイク・クルのような文法項目は、混同が起りやすく、学習した後でも定着するまで時間を要することが多いのであろう。<sup>18</sup>

## 4.2 補助動詞の脱落

### 4.2.1 物理的空間移動(問5~問7)

前節で述べたように、今回のアンケート調査では全体的に補助動詞テイク・テクルの脱落の改善が見られた。問5の「買ってくる」、問6の「呼んでくる」、問7の「作っていく」を用いる会話であるが、いずれも1回目の調査では「買う」「呼ぶ」「作る」などの本動詞だけで表現していた学習者が、2回目の調査でテイク・テクルを用いていた。中でも問6では補助動詞テクルの使用自体は1回目と2回目とで2例から10例へと増えており、活用の誤りや文脈に合わない内容も含まれてはいるものの、脱落の改善が顕著に現れた例であった。その他にも、問5に関しては、2回目でテクルを用いた回答が5例から8例へと増え、そのうち4例が1回目では「テクル」の脱落した回答であった。問7では

<sup>17</sup> 問1では、ロシア語ではクルに相当する「прийти」を、中国語ではイクに相当する「去」を用いることが母語話者の内省から確認できた。

<sup>18</sup> 他にも、2回目のアンケートは期末テスト終了後に実施したという時期的な問題もあり、1回目で正解した問題が2回目で不正解となった例について、時間がなくて急いでしまった学習者(NNS13)や、テスト後の疲れが影響して文脈が読めなかった学習者(NNS2、NNS6)もいたことがインタビューから分かった。正解が「行けない」となる問4では、文脈に合わない「いく(NNS2)」「しゅっせきする(NNS6)」などの回答が見られた。ただし、これらの学習者は、インタビューでは正答が分かり、意味の説明も正確にできていたことから、2回目の実施時期も回答に影響を与えた要因の1つとして考えられる。

テイクの使用が2例から3例へと増えており、授業を通じて補助動詞の意識化が進んだのではないかと考える。これに関しては、インタビューで次のような発言があった。

- ・(問5に関して) 先生の授業で、「買っていく」は帰るかどうかわからない。「買ってくる」は買って、また戻ります(中略)これ、1人が「買いにいきます」、また1人が待っているから、「買ってきます」(NNS12)
- ・(問5に関して) 太郎さんはすぐ買ってくる。買って、たとえばコンビニで買って、また戻りますから、「買ってくる」すぐ(自分に近づく手振り)。(NNS15)
- ・(問5に関して) 一番分かりやすい方法で、友達みたいな感じで。何か探して、持って行きます。(自分に近づく手振り)ここに。あなたのために。(NNS6)
- ・(問6に関して) 鈴木さんなら、隣の部屋にいます。鈴木さんに呼んで、くる(自分に近づく手振り)と思います。(NNS12)

このように、補助動詞を使った理由について説明できるNNSが多く、特に、テクルの使用について、手振りを使いながら「離れてまた戻るからテクルを使う」というような説明ができる場合が多かった。

問5および問6と比較すると、問7では補助動詞の脱落した「作る」が2回目でも多く見られたが、これに関しては、「パーティーで作るなら、みんなで一緒に作ろうとか、そういうパーティーもありました(中略)自分の経験によってそう想像しました(NNS6)」「鈴木さんの家で料理を作ります、と思いました(NNS12)」などの発言があった。回答者はパーティー会場で参加者が一緒に料理を作るといふ場面を想定して回答したと思われる。これについてはNSの回答にも同様に「作る」「振る舞う」「ごちそうする」などの回答が数件見られることから、文脈として「会場で料理を作る」という場合も想定できる問題であったこと、またNNS6の発言にもあるように、NNS・NSともにそれぞれ1人暮らしの留学生、大学院生が大半であることもあり、友人などの家(部屋)で一緒に料理を作るといふ場面を想定しやすかったのではないかと考える。

#### 4.2.2 対象の移動(問8、問9)

「お菓子を送る」「電話をかける」など動作の対象物である「お菓子」「電話」が話し手に向かって移動することを表す場合はテクル(もしくはテクレル)を使って話し手に視点があることを表す必要がある。しかし、日本語学習者は対象の移動を表すテクルが脱落してしまうことが多く、菅谷(2002)で指摘されているように、上級レベルの学習者であってもテクルの非用が多いという。

本研究でも、NNSの1回目の調査では「送った」「電話をした」のような本動詞だけで表現する学習者が多く、2問とも補助動詞を使わない非用の誤用が見られた。しかし2回目の調査では、テクルの使用が問8で0例から2例へ、問9では1例から11例へと増えていた。特に補助動詞脱落の改善が顕著に見られた問9の「電話をかけてきた」は、ほとんどの学習者に意識されるようになっており、インタビュー調査でも「自分の方にくるから、テクルを使う」というような対象の移動を表す表現であることが説明できるようになっていた。インタビューでは、他にも以下のようなコメントがあった。

- ・(問9に関して) まずは「電話をかける」。私の方は、自分の方は、相手から「てくる」と、セットで覚えています(NNS9)
- ・お母さんから電話がかかってきます。「かかって」だけでは、私は母に電話をかかると、かかってますか、母から私にかかっていますか、と思いますけど、かかって、きた(自分に近づく手振り)(NNS12)
- ・(問9について) お母さんから電話が来ました。そういう感じ。(NNS15)

以上で分かるように、対象の移動を表す用法については教育現場で取り上げ、丁寧に説明すれば、改善が期待できると思われる。

一方、問9ほどの改善が見られなかった問8では、2回目の回答にも補助動詞の脱落した「作った」が多く見られた。問8は留学生である話し手が日本でチューターと話しているという場面設定ではあるが、国の母が発発前に作って持たせてくれたお菓子を、来日直後にチューターへ渡す場面であると想定すれば「国の母が作ったんだけど」とすることも可能で、それが補助動詞脱落の改善が見られなかった一因であると考えられる。これについてはNSの結果を見ても22名中8名から「作った」という回



答が出ており、やはりアンケート作成上の問題であったと思われる。また、NS の回答に「作った」が散見された理由としては、NNS と場面の理解にずれが生じたためであるとも考えられる。日本に住んでいる母語話者で、「母」と同居している人であれば十分に考えられる回答例であり、そうした回答者の背景が結果に現れていた可能性も考えられる。

#### 4.2.3 時間の経過による状態の変化 (問 10-1、問 10-2)

問 10 は、時間の経過に伴う状態の変化を表す補助動詞のテイク・テクルの習得を確認するための問題である。基本動詞ハンドブックでは動作の継続、段階的な変化、事態の進行、のように説明されている用法で、段階的な変化や継続性を表すためにはテイク・テクルを接続させたほうが自然な表現になる。問 10-1 は過去から現在への段階的な変化を表すもので「なってきた、なっている」、問 10-2 は現在から未来への変化を表すもので「なっていく」といった回答を期待していた。

NNS の 1 回目の調査では状態を表す「なる」の使用は多かったが、テクルを使用した学習者は 4 名で、問 10-2 でテイクを使用した学習者は 3 名のみであった。特に、問 10-1 の場合、段階的な状態の変化とともに現時点での知覚の意味を含めて表す場合「～なってきた」と表現しなければならない。NNS の 15 名の中で、「なってきた」と正確に表現できたのは 1 名のみであった。しかし、2 回目の調査では、7 名が「なってきた」と表現することができ、テクルの使用のみならず正答も増えており、著しい改善が見られた。問 10-2 の場合も 1 回目の調査では「なっていく」と表現できたのは 3 名だけであったが、2 回目の調査では 4 名と増えており、少しではあるが改善が見られた。「～てきた」の使い方については、授業で知覚のテクルの用法とともに、認知したことを表す「た形」を丁寧に説明しており、その学習効果が見られたのではないと思われる。問 10 の回答について、補助動詞を使用した NNS はインタビューで以下のように述べていた。

- ・いきなりじゃなくてどンドン。現在まで、なんか、なってきた。こういうプロセスがきている。(NNS6)
- ・過去から現在は「クル」を使います。現在は未来に「イク」の方向？だから未来は「イク」(NNS9)

全員ではないものの、1 回目に比べて変化を表すテイク・テクルの用法が学習者に意識され始めた可能性がある。

NS の回答には NNS 以上にばらつきが見られた。問 10-1 では「なってきた」が 6 名、「なっている」が 1 名で、テクルの表現を使った回答者は 7 名であった。10-2 では「なっていく」は 1 名のみで、推量の「なりそうだ」が 5 名、主観性表現の「なると思う」が 2 名、アスペクトの「なってしまう／なっちゃう」が 3 名で、「なる」が 7 名など、テイクの未来への変化の意味を表す場面ではバリエーションが見られた。このことから、テイク・テクル以外の回答が許容され得る問題であったことがわかり、補助動詞の使用に関しては著しい改善が現れにくい問題であったと思われる。しかしながら、問 10-1 ではテクルの使用が増え、インタビューの内容にも学習者の意識化がうかがえたことは注目に値する。

以上のように、本研究においては補助動詞が学習者に意識され、脱落の改善が見られた。授業ではプロトタイプ理論に基づき、本動詞の意味を理解させてから補助動詞を導入したが、本研究は「補助動詞の習得には本動詞との意味のつながりが関わっている」とする菅谷 (2002) の指摘を支持する結果となった。

#### 4.3 文法項目イク・クルに関する学習者の認識

以上述べてきたように、1 回目と 2 回目の調査結果には本動詞・補助動詞ともに変化が起こっているが、インタビューから学習者には文法項目に対する認識自体が変化している可能性がうかがえた。以下、具体例を示しながら検討していく。

- ・文法 (イク・クル) はこの前も何か使ってる文法でした。私にとって。(中略) 授業の時、説明したら「あーわかりました」と。でも後、使う時ロシア語で考えるので、何か間違えます。今でも (NNS2)
- ・(授業で) スライドでもロシア語と英語で書いてありましたね。それ見て、よくわかりましたと思

います。イメージが覚えています (NNS2)

- ・(授業で) 中国語と英語、日本語の違いを分析しました。面白いと思います (中略) これだけ覚えてました (NNS9)
- ・(問5について) これは中国語とはちょっと違います (中略) 中国語で「我」私、「去」行く、「買」買います。でも、あの、(話し手が発話時の場所に) 帰るかどうか、クルかイクか、話すの 때가 (中国語では) 話せない。「我去買。」だけで (NNS12)

これらの発言からは、学習者にとってイク・クルが既習であり、母語にも類似の表現があることがうかがえる。また、NNS2 や NNS9 の発言にもあるように、授業で母語との対照の観点を含めて導入したことは、学習者にとってもかなり印象に残っているようであった。アンケートの回答には未だ本動詞の混同などが残ってはいるものの、授業で母語の移動動詞と日本語のイク・クルの違いについて考えた学習者が、母語との違いやそれによる難しさを意識するようになってきていることが分かった。

次に、文法項目のイク・クルの捉え方についての発言を以下に示す。

- ・(アンケートは) 簡単でした (中略) (今考えると) ちょっと難しい (NNS2)
- ・あの一、前にちゃんと考えないとどうなっていく、わからなかった。だけど、今はもっともつと、なんか速く考えられるみたいな感じでそんなに努力は必要ない (NNS6)
- ・普通のイク・クル簡単だと思います。でもこの2つの言葉、組み合わせは、「買ってくる」とか「電話をかけてくる」とか、(授業前は) あまりわかりません。今は言葉のセット、どういう状況で使うのが、ちょっとわかります (NNS9)
- ・今はコンビニでアルバイトをします (中略) そんな時が先生の授業が思い出す。(商品を客に)「持っていく」言いますか? もし「持ってくる」、どっちがいいかな? (中略) あの授業が終わったら、このイク・クルが勉強したら、あの、話すの 때가 ちょっと考えます (中略) もし授業がやってないの時は全然 (NNS12)
- ・(1回目のアンケートの時に比べて) 今は話し手の立場について考えてきました (中略) 前は、うん、簡単だと思ったのに、今は、なんか、そんなに簡単じゃないと思いました (NNS13)
- ・だいたい大丈夫と思ったんですけど、今結果を見ると、やっぱり難しかった (中略) 例えば5番の、その「買ってくる」は、全然意味が大丈夫だから、全部そのような、思った。でも、やっぱり間違えが多いから、その、あまり簡単ではない (NNS15)

学習者からは、それまでは簡単だと思っていたイク・クルという文法項目が、授業を通じて難しいということに気づいたという意見が挙がった。先述の通り、それまでは特に意識せず直感で回答したり、母語との対応で考えたりしていたものが、1つの文法項目として取り上げられることで、場面や動作主、方向性、多義性などを理解しなければならないということ、学習者が感じるようになったと思われる。NNS6 や NNS9 のように、以前に比べて考えるようになったことで理解が進んだという発言や、NNS12 のように授業外でもイク・クルを意識するようになったという発言もあり、学習者が今後もイク・クルを重要な文法項目として意識しながら学習していくことが期待できる。

#### 4.4 申し出の「ましようか」の「ますか」化

今回の調査でイク・クルの用法と直接的な関係はないが、問6の文末表現に特徴が見られたため、考察を行う。問6は、学生が先生に対して申し出をするため、「呼んできましようか」とするのが正解となる。しかしNNSの回答は申し出の「ましようか」がない「呼びますか」「呼んできますか」などが大半を占めた。

しかし、このように「ましようか」のない回答はNSの回答にも同様に見られ、22名中「ましようか」と表現したのは13人で、他の8名は「呼んできますか」「電話しますか」「呼びにいきますか」「お呼びしますか」などと回答していた。このように、母語話者の間でも申し出の「ましようか」が「ますか」化する現象が起こっており、周囲の母語話者のこのような用法を聞いた学習者が影響を受けた可能性も考えられる。

## 5. おわりに

本研究では、中級レベルの日本語学習者の移動動詞イク・クルの使用状況を確認し、教室での学習がどのような効果をもたらすかを明らかにすることを目的として、授業の前後にアンケート調査と一部の学習者を対象にインタビュー調査を実施した。その結果、本動詞イク・クルの習得については、本動詞の多義性、母語の転移、方向の混乱などが要因と思われる混同が見られた。

一方、話し手の視点と操作の方向性を表す補助動詞及び対象の移動を表す補助動詞は、授業を受けた後で実施した2回目のアンケート調査で脱落の改善が見られた。インタビュー調査でも視点や意味について説明することができており、補助動詞の用法や使い方に関しては、授業の学習効果が期待できると言える。先行研究ではクルの混同や対象の移動については上級レベルの学習者であっても習得されにくいと指摘されているが、本研究では教室での学習効果が見られており、日本語教育現場でのイク・クルの指導の重要性が示唆された。

しかし、1回目のアンケートを実施してから授業を経て、2回目のアンケートを実施するまでの期間が約1ヶ月半と短く、中級前期の学習者が文法を理解し、定着するための時間としては不足しており、学習効果を検証する時期としては不適切であったという問題がある。また、2回目のアンケート実施が期末テストの直後であったため、学習者には負担が大きく、時間的な余裕もなかったという問題もある。そして本動詞の混同に関して考える際は、学習者の視点の置き方にどのような変化があったのかということについても考えなければならない。学習者の母語の影響や教室学習後の認識の変化などについてもフォローアップインタビューなどを通して検証する必要があるだろう。これらについては今後の課題としたい。

## 付記

本研究のアンケート調査、インタビュー調査にご協力くださった日本語学習者の皆さん、およびT大学在学中の日本人大学院生の皆さんにこの場を借りてお礼申し上げます。

## 参考文献

- 天野みどり (2008) 『学びのエクササイズ 日本語文法』 ひつじ書房
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』  
スリーエーネットワーク
- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』 凡人社
- 梅岡巳香 (1999) 「「ていく」「てくる」の練習」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 第  
25号、71-82
- 菅谷奈津恵 (2002) 「日本語学習者によるイク・クル、テイク・テクルの習得研究：プロトタイプ理論  
の観点から」『言語文化と日本語教育』 第23号、お茶の水大学、66-79
- 鈴木秀明・榎陽子・許明子 (2012) 「中級レベル文法クラスの実践報告」『実用日本語文法』の開発」  
『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 第27号、153-170
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析：中国語話者の母語干渉20例』 スリーエーネットワー  
ク
- 中澤恒子 (2002) 「「来る」と「行く」の到着するところ」生越直樹 (編) 『シリーズ言語学4 対照言  
語学』 第10章、東京大学出版会、231-304
- 永田高志 (1991) 「沖縄に生まれた共通語 (文法編)」『琉球の方言』 第15号、法政大学沖縄文化研究  
所、138-173
- 韓京娥 (2012) 「移動方向動詞と結合している「ていく／くる」と「e kata/ota」— 一人称の移動を対  
象に一」『九州大学院言語文化研究院言語文化研究』 第28号、145-154
- ブラシャント・パルデシ (2013) 「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成—研究成果と今後  
の展望」『国語研プロジェクトレビュー』 Vol.4、28-35
- 許明子・鶴町佳子 (2009) 「日本語学習者の中級レベル観」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』  
第24号、19-36
- 許明子・宮崎恵子 (2013) 『レベルアップ 日本語文法中級』 くろしお出版
- 許明子・宮崎恵子・青木幸子 (2013) 「学習者のための中級日本語教育文法の在り方—中級文法クラス  
のアンケート調査とアチーブメントテスト結果の比較を通して—」『筑波大学留学生センター日本語  
教育論集』 第28号、85-104
- 宮崎恵子・二瓶知子・許明子 (2012) 「中級日本語文法教材『実用日本語文法』の開発」『筑波大学留  
学生センター日本語教育論集』 第27号、137-152
- 由井紀久子 (1995) 「日本語動詞の意味の抽象化過程—イク・クル・ミルの意味分析を中心に—」『大  
阪大学文学部紀要』 第36号、1-29
- 吉成祐子 (2014) 「日本語らしい表現を検証する方法の提案：日本語母語話者と学習者の移動事象記述  
の比較より」 *Journal CAJLE*, Vol 15, 21-40
- 国立国語研究所 基本動詞ハンドブック <http://verbhandbook.ninjal.ac.jp> (2016年2月2日最終アクセ  
ス)

## 資料1 アンケート用紙

J510-1A アンケート 国： 名前：  
 ※ ( ) の中に適切な表現を入れて、会話を完成してください。

## 1. &lt;教室で&gt;

田中：あしたはずっと図書館にいるから。

鈴木：うん。じゃあ3時に図書館へ ( ) ね。打ち合わせはそこで。

## 2. &lt;隣の人に電話で&gt;

母：預かってもらっている宅急便ですが、この後、娘が取りに ( ) ので、娘に渡してください。

隣の人：わかりました。渡しておきますね。

## 3. &lt;研究室で席が離れている先輩と後輩&gt;

後輩：先輩、実験の準備ができたんですけど。ここ、ちょっと見てくれないですか。

先輩：うん、わかった。すぐそっちに ( ) から、ちょっと待ってて。

## 4. &lt;家から大学にいる友だちに電話で&gt;

リサ：ごめんね。ちょっとかぜをひいたみたいで、あした、大学に ( ) かもしれない。今度、ノートを見せてくれない？

花子：うん、わかった。じゃ、ゆっくり休んでね。お大事に。

## 5. &lt;教室で&gt;

花子：お腹すいた。お昼、どうしようかー。すぐゼミが始まるしね。

太郎：じゃ、ぼくがそのコンビニで ( ) よ。何がいい？

花子：あ、ほんと？ありがとう。

じゃー、サンドイッチ、お願いしてもいい？

太郎：うん、いいよ。

## 6. &lt;研究室で&gt;

先生：鈴木さんと、ここで、打ち合わせの約束をしてるんだけど、まだかな。

学生：いえ、鈴木さんなら、隣の部屋にいます。( ) か。

先生：うん、じゃ、お願いします。

## 7. &lt;研究室で友だちと&gt;

小川：あした、鈴木さんのおうちでパーティーだよ。陳さんも鈴木さん家に行くんでしょう。

陳：うん。私は国の料理を ( ) つもりだよ。

## 8. &lt;王さんがチューターの鈴木さんに&gt;

王：このお菓子、国の母が ( ) んだけど、よかったらどうぞ。食べてみて。

鈴木：わあ、おいしそう。ありがとう。

## 9. &lt;喫茶店で友だちの二人が&gt;

花子：眠そうだね。きのう、寝てないの？

リサ：うん、きのうの夜、母が電話を ( )、いろいろ話しちゃって…。

長電話になってしまって眠れなかったの。

## 10. &lt;日本に住んでいる留学生同士の会話&gt;

マリ：最近、ますます物価が高く ( ) よね。

スミス：そうだね。留学生は生活がもっと大変に ( ) よ。

資料2 教育支援システム manaba のアンケート画面

日本語の文を作ってみましょう	
受付期間	2015-06-03 10:05~2015-06-21 12:00
ポートフォリオでの扱い	回答を学生のポートフォリオに追加

※アンケート集計シートに表示される問題番号を赤の太字で表示しています（例: **1.1**）。

※（ ）の中に適切な表現を入れて、会話を完成してください。

きょうしつ  
 1.<教室で>

田中:あしたはずっと図書館としょかんにいるから。

鈴木:うん。じゃあ3時に図書館へ **1.1** う あね。打ち合わせはそこで。

となり ひと でんわ  
 2.<隣の人に電話で>

母:預かってもらっている宅急便たっきゅうびんですが、この後、娘むすめが取りに **1.2** わたしので、娘に渡してください。

隣の人:わかりました。渡しておきますね。

けんきゅうしつ せき はな せんぱい こうはい  
 3.<研究室で席が離れている先輩と後輩>

後輩:先輩、実験の準備じゅんびができたんですけど。ここ、ちょっと見てくれませんか。

先輩:うん、わかった。すぐそっちに **1.3** まから、ちょっと待ってて。